

コロナ禍で考えた税の重要性

西条市立河北中学校 3年 長谷部 小雪

「一人一台のタブレット、すごい！」今年の三月、生徒全員に一台ずつのタブレットが渡され、タブレットを使った学習が始まった。正直、私たちが中学生の間に、このような授業が始まるとは思っていなかった。

誰もが想像しなかったコロナウィルス感染の脅威…。この二年間で、学校生活は大きく変化した。一年生の三月には急きょ、学校が臨時休業になり、先の見えない不安な日々が始まった。毎日学校へ行くことは当り前のことではなくなった。このまま授業ができなくて大丈夫なのか。学校から配られた復習問題を解きながら、分からないところは自分で調べながらの学習が続いた。友達と話し合ったり、先生に質問したりしながら行われる授業の大切さを実感した。私たち西条市の小中学校では、他市他県と比較して電子黒板やデジタル教科書を使った授業が行われていて、教育のICT化が進んでいると思っていた。ところが、今回のコロナウィルスのパンデミックの状況下では、日本の教育におけるICT化は、他の先進工業国と比較して、十分ではないことが分かった。学校が休みになった他国では、PCやタブレットを用いた遠隔授業や課題提出を行っている国が多いことを知った。ニュースなどでも、日本のデジタル化の遅れが度々報道された。日本の都市部に住んでいない私たちが、タブレットを使うようになるには、まだまだ時間がかかるだろうと思っていた。ところが文部科学省のHPを見ると、今回のタブレット一台につき四万五千円の国からの補助金が使われていることが分かった。つまり税金である。

私は一学期の終わりに租税教室を受けた。その授業の中で、収入の多い人と少ない人に対してどのように課税していくことが望ましいか、という問題について、グループで話し合った。グループ内では、「お金に余裕のある人がたくさん納めるのが当然だ」という意見もあれば、「同じように公共サービスを受けるのであれば、公正さも重要ではないか」という意見もあった。どちらの意見も一理ある。税務署の講師の方の話から、「国民もあなたたちと同じようにいろいろな考え方を持っている。そのため一つではなく、複数の方法で税を徴収する仕組みを採用している」ことが分かった。今まで、税の重要性は知っていたが、その仕組みや多様な税の種類、税収の格差の問題など、今まで気付かなかった視点から税を考える機会となった。

今回のコロナ禍において、国民一人につき十萬円の給付金に始まり多くの対策・支援が税金や国債発行によって行われた。大切な税が投入される対策や支援について、賛否両論あるが、私たち一人一人が主権者として税の必要性・重要性についてしっかりと考えていかなければならない。そして、持続可能な社会を目指して責任を果たしていきたい。